

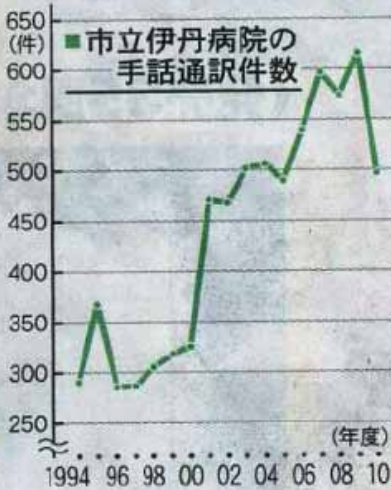
市立伊丹病院 手話サークル「たんぽぽ」の活動が、神戸新聞に取り上げられました！

市立伊丹病院（伊丹市昆陽池1）の看護部長江木洋子さん（57）らが、聴覚障害がある患者に対して手話通訳を行うため、院内サークル「たんぽぽ」を結成し、間もなく丸18年を迎える。メンバーによる手話通訳は、当初

の年間延べ300回程度から、500～600回と倍増し、命に関わるコミュニケーションを支えている。県内でも珍しい取り組みについて、歩みをたどりながら課題を探った。
（霍見真一郎）

聴覚障害の患者に安心感

院内で手話通訳18年



1982（昭和57）年、同病院に、小学生の女兒が母と祖母に連れられて来院した。診察中、医師と話すのは祖母だけ。江木さんは、親子に手話で語り掛けた。通訳を頼まれ、医師の話を手話で伝え、親子らの思いを医師に話した。同病院の診察室で初めて行われた手話通訳だった。これを機に、各科から通訳を依頼されるようになり、徐々に聴覚障害がある患者の来院が増えていった。

江木さんは85年、仲間3人とともに、手話サークルの前身をつくった。伊丹ろうあ協会から指導

者の派遣を受け、週1回勉強会を開いた。94年度には会則も作り、正式にサークルが発足。「綿毛」と呼ぶのは祖母だけ。江木さんは、親子に手話で語り掛けた。通訳を頼まれ、医師の話を手話で伝え、親子らの思いを医師に話した。同病院の診察室で初めて行われた手話通訳だった。これを機に、各科から通訳を依頼されるようになり、徐々に聴覚障害がある患者の来院が増えていった。

江木さんは85年、仲間3人とともに、手話サークルの前身をつくった。伊丹ろうあ協会から指導

1982（昭和57）年、同病院に、小学生の女兒が母と祖母に連れられて来院した。診察中、医師と話すのは祖母だけ。江木さんは、親子に手話で語り掛けた。通訳を頼まれ、医師の話を手話で伝え、親子らの思いを医師に話した。同病院の診察室で初めて行われた手話通訳だった。これを機に、各科から通訳を依頼されるようになり、徐々に聴覚障害がある患者の来院が増えていった。

江木さんは85年、仲間3人とともに、手話サークルの前身をつくった。伊丹ろうあ協会から指導

者の派遣を受け、週1回勉強会を開いた。94年度には会則も作り、正式にサークルが発足。「綿毛」と呼ぶのは祖母だけ。江木さんは、親子に手話で語り掛けた。通訳を頼まれ、医師の話を手話で伝え、親子らの思いを医師に話した。同病院の診察室で初めて行われた手話通訳だった。これを機に、各科から通訳を依頼されるようになり、徐々に聴覚障害がある患者の来院が増えていった。

江木さんは85年、仲間3人とともに、手話サークルの前身をつくった。伊丹ろうあ協会から指導

市立伊丹病院 看護師らのサークル「たんぽぽ」

Report Hanshin



筆談用ボード設置など 環境の整備 促進にも一役

ドを置き、診察の順番が来たら振動で伝える機器も導入した。救急外来にはフックスを設置。カルテファイルに手話通訳が必要な患者を示し、その日の通訳担当者が分かる一覧表も配った。

その結果、手話通訳回数は約18年間で倍増し、昨年11月時点で通訳7789回に上った。

医療情報を得る機会が少ない聴覚障害者のため、同サークルは99年から、医療講習会も始めた。心臓の病気、更年期、インフルエンザなど、テーマファイルに手話通訳が必要な患者を示し、その日の通訳担当者が分かる一覧表も配った。同市広畑5の川洲一江さん（38）は「サッカーをしている息子にもしものことがあったら、と思って参加した。音が聞こえなくても自動体外式除細動器（AED）を操作できると知り、安心した」という。

今後の課題は通訳担当者を増やすこと。2009年からは、サークル以外の職員対象に手話入門講座を始めた。江木さんは「院内サークルは、県内ではとても珍しい。一般の通訳者より医療の知識に明るい看護師らが手話をするのは大きな意義があると思う」と話している。

医療講習会で救急蘇生法を学ぶ聴覚障害者ら（2011年11月、市立伊丹病院）